

高接ぎ 2 年目における「させぼ温州」の側枝の芽かき程度と枝の形質及び翌年の着花（果）量

[要約] 「させぼ温州」の早期安定着果を図るためには、高接ぎ 2 年目の新しょう（側枝）発生を 10 cm 間隔程度に制限にしたほうが高接ぎ 3 年目の着果数が多く、収量も増加する。

長崎県果樹試験場・常緑果樹科	専門	栽培	対象	果樹類	分類	指導
----------------	----	----	----	-----	----	----

平成 13 年度長崎県果樹試験場業務報告

[背景・ねらい]

高接ぎ 2 年目「させぼ温州」において新しょう（側枝）の芽かき程度が、高接ぎ 3 年目の枝の形質、着花、収量等に及ぼす影響を調査し、早期安定結実のための枝管理法を検討する。

[成果の内容・特徴]

- ① 側枝の枝径、枝長、葉数、夏枝数とも 20 cm 間隔区が最も大きい。側枝数が多い 5 cm 間隔区の枝は、最も小さい（表 1）。
- ② 側枝 1 枝当たりの有葉花数は、20 cm 間隔区が最も多く、次いで 10 cm 間隔区が多く、5 cm 間隔区は少ない。直花数は、10 cm 間隔区が他の 2 区に比べ多い。全着花数は、10 cm 間隔区が最も多く、5 cm 間隔区が少ない（表 2）。
- ③ 新しょう数については、5 cm 間隔区が他の区に比べ極めて少ない（表 2）。
- ④ 着果数は、着花数と同様な傾向である。全着果数は 5 cm 間隔区 10 cm 間隔区が多く、20 cm 間隔区は少ない。結実率は 20 cm 間隔が最も高く、5 cm 間隔区が小さい（表 3）。
- ⑤ 収量は接ぎ穂より発生した枝全体の重量で見ると、10 cm 間隔で側枝を配置した区が最も収量が多く、側枝数の少ない 20 cm 間隔は側枝単位では着果は多いが枝全体としては収量は低い。また、1 果平均重は 5 cm 間隔区がやや小さい傾向である（表 3）。

[成果の活用面・留意点]

- ① 高接ぎ 2 年目の新しょう発生を制限するためには、高接ぎ 1 年目に接ぎ穂より発生した新しょうの頂芽 1 本を伸長させ、その他の芽は全て芽かきして枝の伸長を促しておくことが前提条件となる。

[具体的データ]

表1 「させぼ温州」高接ぎ2年目の芽かき程度と枝の形質(2000年)

処 理	側枝数 ¹⁾ (本)	枝 径 (mm)	側枝長 (cm)	葉 数 (枚)	夏枝数 ²⁾ (本)
5cm間隔	35.0	4.7b	29.2b	18.7b	0.7b
10cm間隔	18.8	5.8a	45.1a	33.1a	1.5ab
20cm間隔	9.8	6.1a	47.7a	39.9a	2.3a
有意性		*	*	**	*

²⁾ 春枝1本当たりの夏枝発生数

¹⁾ 前年の接木後に伸長した枝から発生した側枝1本当たりの夏枝数

** は1%水準で有意差有り、* は5%水準で有意差有り、異なる文字間で有意差有り

表2 「させぼ温州」高接ぎ2年目の側枝の発生程度と次年の着花数(2001年)

処 理	着花数 ²⁾			全着花数 ¹⁾ (個)	新しょう数 (個)
	有葉花 (個)	直花 (個)	合計 (個)		
5cm間隔	11.3	5.9	17.2	601.4	0.6
10cm間隔	13.4	12.9	26.3	494.0	3.6
20cm間隔	15.2	5.0	20.2	198.2	3.9
有意性	ns	ns	ns	ns	ns

²⁾ 着花数は、前年発生した側枝の平均値

¹⁾ 全着果数は、接ぎ穂から伸長させた枝1本当たりの平均値

表3 「させぼ温州」2年目の側枝の発生程度と次年の着果数(2001年)

処 理	着 果 数 ²⁾			全着果数 ¹⁾ (個)	結実率 ¹⁾ (%)	収量 ³⁾ (kg)	1果平均重 (g)
	有葉果 (個)	直花果 (個)	合計 (個)				
5cm間隔	0.9	0.3	1.2b	43.6	7.2	3.8	100
10cm間隔	2.3	0.4	2.6a	49.2	10.0	5.4	105
20cm間隔	2.6	0.3	2.9a	28.6	14.4	2.9	105
有意性	ns	ns	*	ns	ns	ns	ns

²⁾ 着果数は高接ぎ2年目に発生した側枝当たりの平均値

¹⁾ 全着果数は、接ぎ穂から伸長させた枝1本当たりの平均値

³⁾ 収量は、接ぎ穂から伸長させた枝1本当たりの重量

[その他]

研究課題名 : 「させぼ温州」の早期樹冠拡大と高品質果安定多収技術

予算区分 : 県単

研究期間 : 平成13年度(平成13年~15年)

研究担当者 : 古川 忠

発表論文など : なし